

競技かるたの奥深い楽しさを伝えたい

府中白妙会 前田秀彦さん

小倉百人一首の「競技かるた」は、知的スポーツ、畳上の格闘技と言われます。長年 分梅町一丁目公会堂を中心に競技かるたの普及に取り組み、若手を育ててこられた前田さんに聞きました。



練習場を見せていただきましたが、昼間は子供さんが多いですね。

そうですね。やはり漫画「ちはやふる」の影響だと思いますが、入会希望が多くて嬉しい悲鳴です。府中白妙会を立ち上げた時を思うと夢のようです。今では増えた会員の練習場を確保するのも大変なほどです。他のかるた団体では入会制限をしている所もあるようですが、私は折角かるたを志してくれた人は大切にしたいという思いが強いので、できるだけ皆さんに入っていたらと頑張っています。

「ちはやふる」は府中白妙会の会員が、漫画家・末次由紀さんに競技かるたを題材にすることを提案。前田さんとの対談から構想ができ、会の全面的な協力で大ヒット作品に。主人公の所属する府中白波会は、府中白妙会がモデル。

府中白妙会を始められたのはどういう経緯だったのでしょうか？

私は福井県出身で、小学校6年生の時に競技かるたを始め、18歳の時に上京して競技かるたの名門東京白妙会で研鑽を積みました。35歳で府中に越し耳鼻科を開院したのを機に、府中白妙会の元となる府中かるた会を立ち上げました。昭和63年のことです。

早速片町文化センターに団体登録して活動を始めましたが、会員はなかなか増えませんでした。

それで平成2年から初心者教室と初心者大会を開催し競技かるた

の普及に努めました。以来今日まで約30年にわたり競技かるたの楽しさ面白さを伝えていく活動を続けています。今では約100名の会員がいて、週4回の練習日は大盛況です。ありがたいことですね。



札の並べ方を熱心に指導する前田さん

競技かるたの魅力は？

競技かるたは2人で対戦します。百人一首の下の句が書かれた100枚の取り札の中からランダムに50枚を抽出し、お互いに25枚ずつを自陣に並べ、上の句が読まれた瞬間に札を取り合う競技です。自分の札を取れば自陣の札が1枚減り、相手の札を取った時には自分の札を1枚相手に渡します。先に自陣の札を無くせば勝ちとなります。

勝つには当然早く取ることが大切なのですが、早さを磨くだけではダメ、100回競走じゃないんだから。そこには自分の札を自陣にどのように並べるか、相手陣をどのように攻めるかという戦略・戦術なども絡んでくる。どう攻め、どう守るのかを深く考えるのが大切です。競技かるたは、その「考える」「攻める」が面白い、本当に奥深い競技なんです。

初心者、中級者、上級者それぞれに楽しいし、強くなればもっと楽しい。早く名人戦の予選に出場できるA級選手になって、かるたの奥深さを楽しもうと言っているのです。

かるたを学ぶ人に伝えたいことは？

会員たちには、競技かるたを通して小倉百人一首という千年以上続く日本文化に触れる喜びを感じて欲しいです。また、競技かるたは、どちらの選手が早く取ったかの微妙な判定は、競技者同士で話し合っただけで決めることになっています。競技かるたから人間関係も学んで欲しいですね。

それに、競技かるたは、戦術や戦略を駆使して一瞬を争うスポーツです。年齢に応じた戦い方・楽しみ方がありますから、生涯学習としてチャレンジすることもでき、脳トレにも大変役立つと思います。私も、53歳の時25年ぶりに3度目の準名人になりました。



競技かるたは老若男女が一緒に楽しむ

これからの目標は？

老化はすべての人に必ず訪れます。競技かるたの勝敗を左右する聴力、反射神経、暗記力も年々衰えてきますが、少しでも老化を補うべく鍛錬し、老若男女が楽しめるこのかるたを、若い人たちといつまでも競技していきたいと思っています。

そして、若手・後輩を育てながら府中白妙会を盛り立て、千年もの昔から続き日本の伝統文化ともいえる小倉百人一首に込められた日本人の心を、「競技かるた」の普及・発展に力を尽くすことで広く伝えていきたいと思っています。



府中白妙会のレベルは高く、取材日(木曜夕方)の練習に集まった子供達の中にも優勝者がいっぱい！ 入会動機を聞くと、「ちはやふる」にあこがれて、お母さんやお姉さんの姿を見てなど。長年の指導が実った感じがうかがえた。(記：西谷信昭)